

# NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第85号  
2016.10.15

●特集・学校図書館の充実とNIE▶1~3 ●ニュースパーク活用のすすめ／「教育実践データベース」の活用術／アドバイザー紹介／NIEフラッシュニュース▶4~5 ●第21回NIE全国大会大分大会／全国NIEアドバイザー会議▶6~7 ●〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2016年 日本新聞協会

編集・発行 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp  
〒100-8543 東京都千代田区千代田 2-2-1 日本プレスセンタービル [http://nie.jp] [http://www.facebook.com/Nie47]

## 特集 学校図書館の充実とNIE

中央教育審議会が検討が進む次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現と学習・指導方法の不断の見直しが求められている。学校図書館には言語活動や探究活動の場となり「アクティブ・ラーニング」を支援していく役割が一層期待される。学校図書館の充実とNIE活動が児童生徒の豊かな学びに果たす役割を考える。

学校図書館は、図書館資料を児童生徒や教員の利用に供すること等により、学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童生徒の健全な教養を育成することを目的としている。

### 主体的・対話的学びに寄与

現在、中央教育審議会では、次期学習指導要領の改訂について議論が進められている。その中では、「何ができるようにするか」という視点から情報活用能力や言語能力を教科等横断的に育んでいくこと、「どのよう



文部科学省初等中等教育局児童生徒課長 坪田 知広

### 主権者教育に新聞は有意義

また、公職選挙法等の改正に

待たれている。

に学ぶか」という視点から主体的・対話的で深い学びの実現いわゆる「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を図ることが重要であるとの議論がなされている。このような状況を踏まえ、これからの学校図書館には、読書活動の推進のための利活用に加え、各教科等の授業における言語活動や問題解決的な学習、新聞を活用した学習（いわゆるNIE）などのさまざまな学習・指導場面での利活用を通じて、子供たちの言語能力、情報活用能力の育成を支える基盤としての役割が一層期待されている。

### 資料・人材の充実が必須

より選挙権年齢が満18歳以上に引き下げられたことにより、これまで以上に、現実にある課題や争点について自らの問題として主体的に考え、判断するといった学習活動等が重要であり、そのために主権者教育の推進が求められている。特に、新聞を主権者教育に活用することは、国語力を高め、社会的事象を多面的に考察し、公正に判断する力を育んでいく上で有意義である。

さらに、文部科学省では、

「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」を設置し、学校図書館の運営に関する基本的な視点や、学校司書の資格・養成の在り方等に関して、「これからの学校図書館の整備充実について（報告）」のとりまとめに向けて検討を進めているところである。

このように、学校図書館の重

要性が高まる中、一層の整備充実を進めるため、図書館資料と人材の双方の充実が必要である。資料については、2012年度から公立の義務教育諸学校において、「第4次学校図書館図書整備5か年計画」の下、毎年度200億円、新聞についても15億円（各校1紙配備分）の措置が行われている。人材については、14年の学校図書館法の改正により学校司書が法制化された。また、5か年計画の下、毎年度150億円の措置が行われているところである。

この5か年計画も今年が最終年度であり、現在次年度以降の地方財政措置について検討を進めている。

実際に各学校、地域において学校図書館の充実を図るためには、各市町村において新聞を含む図書館資料の購入費等の予算化を図り、整備を計画的に進めていただく必要がある。

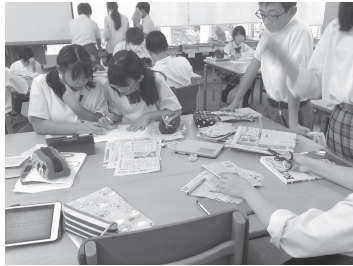
今後とも多くの関係者の皆様へ学校図書館の意義をご理解いただき、その充実にご協力いただくようお願いしたい。

事例報告

生徒自らが考える  
課題解決型学習の場



工学院大学附属中学校・  
高等学校司書教諭  
有山 裕美子



新聞を使った調べ学習に取り組む生徒

1996年の中央教育審議会の答申に初めて登場した「生きる力」は、自ら課題を発見し解決する能力やコミュニケーション能力、クリティカル・シンキングや情報リテラシーに重きを置いたものだった。そして今、検討が進む新学習指導要領に目を向けると、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」「何が求められるようになるか」ということが求められている。これらの力を育てていくためには、

生徒一人一人の探究の過程において、学校図書館がどのように関わるかという点が重要だ。

本校における一例として、「新聞切り抜き作品コンクール」への応募での活用がある。この取り組みは社会科の授業で行っている。そのねらいは「新聞に親しみながら、読解力、言語力、思考力を高めること」であり、

それらは「社会の様子（変化）を知り、疑問を持ち、自ら考えること（クリティカル・シンキング）」につながる。また、最終的に作品にするには、デザイン力や発信力が求められる。さらに、活動を通して導き出された自分の結論（考え抜いた「知」）を、実践に結び付けるという目標がある。つまりこの学習では、新聞というツールを用いて、課題発見↓情報収集↓取捨選択↓まとめ↓発表↓実践・振り返りといった、思考のプロセスが系統立てて行われているのだ。これはまさしく自ら考える「課題

解決型学習」にはかならない。

学校図書館では、社会科の教員と協力してこれらの学びに総合的に関わっている。一次的なアプローチとしては、まず資料の整備だ。購読している6紙を見やすいように整理しているほか、原則3年分の新聞を保存している。それらも棚に分け生徒が直接手に取れるようにしている。縮刷版やデータベースを活用する一方、原紙を見て切り抜

事例報告

学校司書・教諭の連携で  
授業での活用を促進



島根県立  
出雲商業高等学校  
学校司書専門員  
庄司 友紀

本校では、豊かな言語能力を育成するため、朝読書を実施し、図書館活用教育やNIEにも取り組んでいる。今年度は、教諭2人と学校司書1人で図書の手帳を担当している。現在の校内情報環境整備に向けた取り組みを報告したい。

くことで、生徒は新聞の見出しや紙面割りなどが学べる。

基本的な資料へのアプローチは司書教諭が教えるが、どの情報が必要か、何を中心に置くかは社会科の教員が中心になって、連携しながら進めている。図書館という空間で、ともに課題に取り組むことでコミュニケーション力も必要になるし、グループで一つの作品を完成させることもある。上級生が新聞を切り

抜いている様子を見ながら、次年度の自分たちの取り組みを重ねる下級生もいる。また、新聞記事に触発されて学びを深めようと思ったときも、学校図書館には多様な資料が用意されている。

こうした取り組みを通し、生徒はさまざまなことを学んでいる。今後も生徒の豊かな学びのために、学校図書館を充実させていきたい。

て教職員へ情報提供している。

②新聞記事のファイル作成

新聞記事をテーマごとにスクラップし、まとめたファイルを作成している。生徒の進学・就職希望先を参考に、医療、教育、郷土など8テーマを設定している。本校では、6紙を購読しているため、多様な記事を集めることができる。3年生が、小論文や作文の題材の資料として利用することが多い。

③新聞記事の掲示、新聞の別置

コラムや特集記事を毎日掲示しているほか、当日の新聞を廊下にも置いている。生徒や教職



特集 学校図書館の充実とNIE

佐賀県伊万里市黒川町は、家庭での読書を推進する「家読」活動に積極的に取り組んでいる。子供も足を運びたくなる図書館にしようと、県の「特色ある学校づくり」事業で図書館をリニューアルするなど環境も整備した。その結果、一昨年度は一人当たり168冊（前年度の倍）の貸し出し冊数になるなど、読書活動がさらに積極的になった



伊万里市立黒川小学校教頭 岩崎 達義

事例報告  
学校・地域を挙げた  
図書館教育

④生徒（図書委員）の活動  
同じ話題の取り上げられ方の違いを、3紙以上の新聞を使って比較している。図書委員が選んだ記事と、見出しや写真の使

い方など気付いた違いを画用紙にまとめ、関連資料と一緒に展示している。生徒は、地歴公民科（1年次）や国語科（2、3年次）で時事ノートの提出課題があるため、こうした作業への抵抗感はありません。LHRの時間を利用した学習進路指導部と連携して、1、

本校の研究主題は、「学校図書館を活用し、いきいきと学ぶ子どもの育成」。読書は豊かな感性や知性を育てるために欠くことのできない活動である。ここに新聞活用を取り入れれば、学ぶ力や意欲を向上させ、図書館で不足しがちな旬の情報資料を獲得させることができると考えた。

まず手始めに、新聞社から講師を招き、新聞活用教育についての研修会を実施した。その上で職員が校内研究と関連付けて活用方法を話し合った。「写

真や記事をもとに感想を書く」「報道された「人」から生き方や努力を学ぶ」「テーマを決めて記事を集め、見出しや感想をつけてマイブックを作成する」などの意見が出され、これまで行ってきた図書館教育にNIEを取り入れ、学校全体で取り組んでいくことを確認した。

2年次で各1時間、LHRの時間に「学び方・調べ方を学ぶ」授業を行っている。情報の読み取り方や整理の仕方、資料の探し方について学習している。



新聞スクラップで地域の人との交流も生まれた

また、地域の老人会や区長会の皆さんに自由に学校に来てもらい、新聞スクラップ作成をお願いした。不定期ではあるが、2週間に一度程度のペースで、授業のテーマに沿った情報

を利用することにも抵抗がなくなってきたように思う。図書館側からも、資料収集や利用について働きかけがしやすくなり、単元に合わせて資料を展示するなど授業と関わる機会が増えていく。

児童生徒の学びをより豊かなものにしていく上で学校図書館が果たす役割は一層大きなものになっている。主体的学びを支える探究心・言語活動の downstairs の場としての図書館を整備し、今後も図書館教育と新聞の活用を模索していきたい。

童の表現力や言語活動の充実につながるという実感を持ち始めている。

また、生徒は時事ノートの課題を継続して行うことにより、を継続して取り組んでいきたい。



生まれ変わったニュースパークは授業にこう使える――

## 国語・社会科の学習にも 役立つ展示内容へ



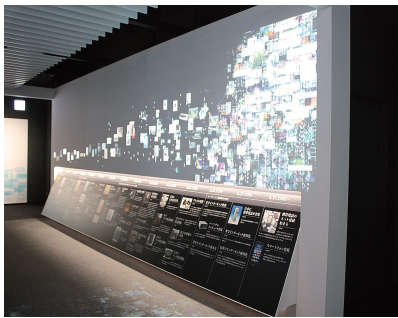
新井 諭 先生  
西立区立小学校  
主任教諭  
拓野 今野

リニューアルしたニュースパーク（新聞博物館）は、学校教育との連携を意識し、校外学習先としてより活用しやすい施設になった。また、展示内容や体験プログラム等も工夫され、児童生徒にとって、親しみやすくなっている。新聞博物館の活用方法について、私見ではあるが紹介したい。

一つ目は、情報について学ぶ場としての活用である。新聞博物館では、今回のリニューアルで、情報社会全体に焦点を当てた展示を充実させた。左右の壁に映像が映し出されるトンネルをくぐることで、近年、情報量が爆発的に増えたことを体感できる「情報タイムトンネル」や、情報社会の明と暗を実例と

もに示した展示は興味深い。これらの展示により、児童生徒が「情報とは何か」を学んだ

り、情報が社会に与える影響について考えたりすることができると関連させて見学したい。また、発信者側の視点を変えることで受け手に届く情報が変わってしまうことを表した「日本メディアアバなし」という展示は、国語科の学習に生かすことができる。このように新聞博物館は新聞について学ぶだけでなく、情報や情報社会そのものを学ぶ施設になっている。



トンネルをくぐり情報化の流れを体感

二つ目は、体験プログラムを通して新聞について学ぶことである。博物館では、社会科にお

ける情報産業の学習に合わせ、新聞の制作過程を詳しく展示している。さらに体験プログラムを併せて活用すると、児童生徒がより学習を深められる。例えば、「新聞レクチャー」では、記者経験のある講師が、新聞について詳しく教えてくれる。また、パソコンを使ってオリジナル新聞をつくるプログラムもあり、新聞制作者の視点に立った学習ができる。さらに注目は、タブレット端末を使って、画面上の人物に取材をするプログラムである。このプログラムは、終了後に本人の取材内容が反映された新聞がもらえる。取材の充実度や取材で得た情報の選択の仕方によって、受け取る作品が変わるのだ。新聞記者の立場を体験でき、さらに目的に合わせた取材の方法や情報の選択構成について学ぶことができるので、これも社会科や国語科に生かせるだろう。

三つ目は、資料アーカイブと



桃太郎を題材にした情報モラルに関する展示「日本メディアアバなし」

しての活用である。新聞博物館には、江戸時代の瓦版や明治初期の新聞各紙が収蔵されており、それらは、当時の様子を表す貴重な資料である。歴史の学習の際に、このような資料があれば、児童生徒は史実をより身近なものとして学ぶことができる。過去の紙面資料は、イメージフィインダーと呼ばれる博物館内にあるタッチパネル式デジタルアーカイブで閲覧できるほか、ウェブサイトで公開している。見学の際にはぜひ触れてほしい。博物館内には昼食スペースがあり、新聞協会加盟全紙を壁に掲示した背景で記念写真を撮れる場所もあった。今後、校外学習先としてぜひ活用したい、おすすめの施設である。

## NIE フラッシュニュース

岡山県推進協力が教育賞を受賞

岡山県NIE推進協議会が2016年度の「谷口澄夫教育奨励賞」を受賞した。同賞は、福武教育文化振興財団が県教育界への貢献が期待される個人、団体に贈る。今年度は3団体が受賞し、7月23日に表彰式が行われた。「子供の言語能力の育成だけでなく、県の教育全体の充実に大きく寄与している」と評価された。同協議会の瀬尾由紀子事務局長は受賞を受け「今後の活動の後押しとなった。NIEのさらなる充実を図りたい」と話した。

◇次期学習指導要領に関する意見募集に対応

文部科学省は9月9日、学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会での「審議のまとめ」を公表し、パブリック・コメントの募集を開始した。新聞協会は10月4日、NIE委員長名で、次期学習指導要領に引き続き「新聞の活用」が明記されるよう要望する意見を提出した。



# NIE活動の後押しに 「教育実践データベース」の活用術



生駒市立光明中学校  
教諭  
篠原 嶺

「児童生徒が新聞に親しむためには、どうしたらいいのだろうか?」「授業で新聞を使ってみたいのだが、参考になる実践はないのだろうか?」

NIEに取り組んで1年目のときは、たびたびこのような悩みや不安を抱いた。そんなときに、奈良県NIE推進協議会実

## NIEアドバイザー紹介

①学校名 ②担当教科 ③NIE 実践歴  
④新聞を活用するうえでの工夫を一言  
(敬称略)



●青森県  
今別 幸司  
(いまべつ・こうじ)  
①青森市立西中学校  
②社会科  
③20年  
④新聞は、社会を見て、社会が分かる、社会に働きかける力の習得に最良の教材と考える。まずは気軽に新聞に触れる環境づくりから…。



●秋田県  
永沢 敏昭  
(ながさわ・としあき)  
①横手市教育委員会教育指導部教育指導課  
②理科  
③5年  
④新鮮で魅力あるニュースをよりおいしく味わえるよう、美しく分かりやすく、そして香ばしくすぐに調理して子どもたちに振る舞う。



●富山県  
松原 隆志  
(まつばら・たかし)  
①富山県東部教育事務所  
②社会科  
③10年  
④新聞記事のスクラップを通して、子供一人一人の興味・関心を高めるとともに、ねらいを明確にした授業構想をすることである。



●鹿児島県  
永田 清文  
(ながた・きよふみ)  
①霧島市立国分小学校  
②小学校全科  
③21年  
④新聞は学習内容と現実の社会を結びつけるリアリティーに満ちた教材である。各教科で説得力ある生きた教材として活用していきたい。

践交流会の場で、全国から寄せられたNIEの実践例がNIEサイトに掲載されていることを知った。今年の4月には、より必要な情報を探しやすくするため、検索機能を強化した「新聞を活用した教育実践データベース」(<http://nie.jp/report/>)としてリニューアルされた。

データベースには9月30日現在で850件以上の多様な実践事例がアップされている。各実践には学校名、校種、学年、教科、使用教科書発行会社など細

かな項目がある。そのため、検索者の学校の状況と照らし合わせやすい。また「初心者向け」とタグが付けられた実践は取り組みやすいものが多く、NIEに携わる若手教師にとっては参考に、学ぶべきものが多い。このデータベースを3段階で利用することを提案したい。

- ①これから行うNIE実践を  
考えるため
- ②過去に取り組んだ自身のNIE実践の意味(価値)を  
考えるため
- ③新聞がどのような教育効果  
を生み出すのか考えるため
- ④私自身、NIEに取り組ん

で1〜2年目のときは、どのように新聞を活用すればいいのか分からなかった。学習活動において新聞は有効だと感覚的には捉えられているが、具体的な実践を創りだせない。しかし、新聞を学習活動に生かしたい。そんなもどかしさを抱えたときに、データベースを開いてみてほしい。自身の勤務先と同じ校種や教科、学年で絞り込み検索を行い、先行実践を参考にするのをおすすめしたい。

②NIEに取り組んで数年がたつと、ある程度の「自分自身のNIE実践」が蓄積される。すると、自身のNIE実践の意

味や価値を明らかにしたいという問題意識が生まれてきた。そのためには他のNIE実践と比べ、相違点や共通点を調べる必要がある。そんなときタグキーワードで検索をかければ、比較対象となる先行実践を探すことができ、問題意識へアプローチできる。

③日常生活や学習活動において、新聞にふれる機会が多くなるにつれ、「新聞とはなにか」「どのようなメディアなのか」「どのような教育効果を生み出すのか」と考えるようになった。そこで、校種をこえて、各NIE実践者がどのようなことを大切に、考えて取り組んでいるのかを知りたくなった。データベースには校種をこえた多様な実践がアップされているため、頻繁にアクセスしている。

普段の多忙な業務の中で、NIE実践を見学することは難しい。何か参考にできるものはないかと頭を抱えるときもあるだろう。そんなときはデータベースを活用してほしい。データベースはNIE実践の宝庫である。

# 第21回NIE全国大会 大分大会

## 「社会で求められる力を培うNIE 「楽しさ」と「意義」を共有

### 大会総括 「チーム・NIE大分」で得た成果 さらなる発展の足がかりに



社団法人新聞推進室  
大分合同NIE編集局長  
白倉 純

震の影響が懸念されたが、結果的にはこれまでで3番目に参加者の多い大会となった。

「新聞でわくわく 社会と向き合うNIE」をスローガンに、第21回NIE全国大会大分大会が8月4、5の両日、大分市のホルトホール大分などで開かれた。公開授業や実践発表、パネルドイスカッションや特別分科会などを通じ、「今のNIE」「これからのNIE」について議論を深めた大会についてレポートする。

NIEの関係者にとって、全国大会と言えば「真夏の暑さ」の代名詞。今年の大会も九州らしい暑い日差しが照りつける中で開かれた。参加者は全国の教育、新聞関係者合わせて約1、400人。4月の熊本・大分地

「わくわく」するNIEをアピールした大分大会。初日のパネルドイスカッションも「楽しくなければNIEじゃない！」をテーマに、実際にNIEに取り組んだ中学生も登壇して堂々と意見を述べた。2日目は9校が公開授業、4校が実践発表を行い、「行政との連携で進めるNIE」など四つのテーマで特別分科会を開いた。

全国大会を開催するに当たり、私たちが最も大切にしたのは、大会を一過性のイベントに終わらせず、NIEのすそ野を広げるきっかけにすること。NIEを始めたばかり、あるいは「これから始めたい」と考えている先生方の参考になり、持ち帰っ

て実践につなげられる内容にしたいと考えた。その意味では、参加者アンケートなどで「初めてNIE担当になり、何をすればよいか分からない中で、さまざまな取り組みが聞けて参考になった」「本年度から研究を始めたところだが、多くのアイデアを得ることができた」といったのはうれしかった。

### 「楽しさ」と「意義」を共有

運営の基本方針としたのは、できるだけ手作り感と温もりのある大会にしようということ。全体会の司会や速報新聞の発行を県内の高校生にお願いし、公

開授業校に、竹と新聞を使った「七夕」をイメージしたウエルカムボードの制作を依頼。会場には児童生徒による新聞を使った工作を並べ、壁新聞も掲示して手作り感を演出した。懇親会のオープニングでの神楽の熱演も含め、高校生たちの活躍はとも評判が良かった。

大会を通じ、「わくわく」「楽しく」といった大分からのメッセージは十分発信できたと思う。また、「組織化」「日常化」「カ

リキュラム化」「効果の見える化」といった課題もあらためて確認できた。開催に関わった県内の教育関係者と私たち新聞関係者にとって、大会で得られた最大の成果は「チーム・NIE大分」の結束力が飛躍的に高まったこと。今回参加した約600人の県内の教育関係者を「財産」として、NIEをさらに普及・深化させるため、これからもさまざまな形で教育現場をサポートしていきたい。



様々な立場から新聞活用の効用について意見が出されたパネルディスカッション

### 特別分科会「主権者教育とNIE」報告 新聞で育てる次世代の市民



江戸川区立東小松川小学校校長  
NIEアドバイザー  
田中 孝宏

「主権者教育とNIE」について3人のパネリストを迎えシンポジウムを行った。主権者教育は①新たに選挙権を有するこ

登壇者：滋賀県立彦根東高等学校 藤村 知行 教諭  
大分県立日田高等学校 賀来 宏基 教諭  
大分合同新聞社 首藤 康 編集局編集委員  
司会者：江戸川区立東小松川小学校 田中 孝宏 校長

ととなる生徒学生に対する取り組み②社会全体で主権者教育を推進する取り組みの二つの側面がある。メディアで多く取り上げられているのは、①の模擬選挙などの実践が多い。今回は二つの面を総合的に考えて、パネリストに実践発表をお願いした。また、会場からの声をできるだけ



け多く取り上げ、会場全体でのテーマを語れるようにした。事前に各パネリストの発表概要は聞いていたが、会場からの多様な質問に対する答えを聞きながら、その意見が一つの方向性を示していったのが象徴的だった。つまり、主権者教育により、幼児・児童・生徒・学生が、一人の市民として、主体的に意見を持ち行動できるようにしてほしいという願いである。

模擬投票の実践発表を行った賀来先生は、その実践において大切にしたのは「投票行為そのものの学習」でなく、「そこに至るプロセス」「流行教育ではない普遍的な教育」「汎正解主義教育からの脱却」だとし、「究極は資料選択などの準備から生徒自身の主体性に委ねていくのが主権者教育である」と述べた。

新聞制作の実践を発表した藤村先生は、一般の新聞情報が社会の窓として、生徒を社会と結びつけていると発表したが、「発信側に生徒が立つことで、多様な意見を考え合わせ、注意深く言葉を選ぶ主体的な行動が

とれる生徒が育つ」と述べた。地域社会の問題解決型ワークショップの実践を発表した首藤さんは、新聞を読み、新聞を使った授業の有効性を主張し、「社会の在り方を学生目線で学び、自らの立ち位置を自ら考えることが、市民意識を形成する」と述べた。

異なるアプローチで主権者教育に迫ったが、前述のように主権者教育の本質的なねらいは同じとなる。それはまた、NIEが目指す目標に重なるところが大きいと改めて確認できた。つまり、主権者教育＝NIEといっても過言ではないだろう。

今大会の記念講演で、作家の小野正嗣氏は、「新聞は、包み込むメディアである。物を、言葉を、傷ついた人々を、人間の喜怒哀楽を——」と語った。それを受けるなら、主権者教育において「新聞は、子供たちを社会に包み込んでいくメディア」と言える。

※NIEサイトで他の三つの分科会リポートを掲載中 (<http://nie.jp/conference/2016/>)

**NIEアドバイザー会議報告**  
**全国規模の効果検証に向け、経験と知恵を出し合い意見交換**



全国大会閉会後の8月5日、ホルトホール大分の会議室でNIEアドバイザー73人が一堂に会し「NIEで高まる学ぶ力ーNIEの効果を検証する」をテーマに、全国NIEアドバイザー会議が開催された。

この会議は、全国のアドバイザーが、今求められている教育課題の解決に向けてNIEをどう生かすかを検討するとともに、各地区の現況について理解し、NIEの普及・発展のための具体的な方策を検討する場である。また、アドバイザー相互の交流を一層深める場でもある。

はじめに、コーディネーターから、全国規模での効果検証の必要性について基調提言をした。全国のアドバイザーを通して、

NIE実践指定校などで「学力」「意識」「行動」などの共通の調査項目について事前と事後で計画的に調査を実施することで、NIEの教育効果を全国に向けて広く発信し、普及・発展の推進力としたいと伝えた。

次に、今回は特別に熊本県の笹原信二アドバイザーより、熊本地震の経験を通して実感したNIEに求められる教育について報告を聞いた。「発生直後は、少ない情報源の中からより良い情報を選択し、行動することが必要。数日後は、多くの情報から、正確かつ、より有効な情報を受信し発信して、行動することが大切」。そこで「多様な価値観を認めつつ、事実を正確に分析し伝え合い、個と集団の考えを展覧させるコミュニケーション力の育成が必要」と話した。

その後、13グループに分かれ、テーマに沿って討議した。日頃の実践の成果や課題も交流し

つ、活発に意見が交わされた。NIEの効果を検証する項目として「教員の意識や指導力」「論述問題の無答率」「子供の行動や心情」「子供の会話の広がりや根拠の深まり」「子供による自己評価や相互評価」「語彙の数や書くスピード」「NIE実施後の進路」などが挙げられ、「20程度の共通調査項目を設ける」「管理職や教育行政に向けて、検証の結果を積極的に発信する」などの方向性が示された。また、「効果を厳密に検証することは難しい」「学力の変化はすぐに見えてこない場合がある」「子供のためであるという目的を忘れない」「新聞を購読していない家庭へ配慮する」などの課題や留意点等も出された。

最後に、コーディネーターに「効果検証のための、共通の調査項目を提案してほしい」との宿題が出された。

すでにアドバイザー通信等で共通調査項目案をお示しし、全国のアドバイザーからご意見をいただいている。調査項目の完成に向け準備を進めている。



かつて「NIE教養ゼミ」という放課後の課外学習を行っていた。参加生徒が新聞記事から話題を見つけて小論文を書き、その小論文を手掛かりに討論するという取り組みである。

近年、アクティブ・ラーニングや主権者教育の重要性が指摘されている。NIE教養ゼミはその先駆的な取り組みであったと改めて考えるようになった。そこで、今年度の取り組みは、このNIE教養ゼミを再生させることに主眼を置いた。

本校には生徒の自主活動クラブとしてNIE研究会も存在す

### 事務局長から一言

大阪NIEを設立当初よりけん引してきた一校が、清風中・高等学校であり、その中心的役割を担っているのが、鎌田隆先

るが、今春、その部員がゼロになった。この研究会を主体としてNIE教養ゼミを再開しようと思ひ、その意義、面白さを、機会をつかまえては生徒や同僚

## 清風中学校・高等学校

教諭 鎌田 隆

◎大阪市／校長：平岡 宏一／生徒数：中学校約990人、高校約2100人  
◎特色：仏教を中心とする宗教を踏まえた人間教育を行い、社会のすべてから安心・尊敬・信頼される人間の育成を目指す男子校である。大阪府下有数の進学校の一つであるが、同時に部活動も盛んで全国大会に多くのクラブが出場している。



NIE研究会の活動の様子



生徒の写真記事作品と筆者

に伝えて回った。一人、二人と参加する生徒が増え、ゼミが成り立つようになった。6月には、公立中学校の先生方が企画した「社会討論」に参

生である。清風中・高等学校は上町台地にある男子校で、文武両道を目指している学校である。「徳・健・財」の建学の精神に基づいた教育が特色であり、小論文指導にも力を入れている。

その一つにNIEの取り組みがあり、「NIE教養ゼミ」という放課後の課外学習として定着し、レベルの高い議論が展開されていた。

加させていただいた。7月には、日本経済新聞社の見学を行い、編集から印刷、発送の過程を学んだ。8月には、写真記事に注目し、撮影実習を読売新聞社のご協力を得て実施した。そして、9月の文化祭では、自作新聞やNIE研究会の取り組みを紹介する出展に加え、読売新聞社の記者を招いてのNIE講座を開催した。

これらを通して、新聞に興味を持ち、社会現象に強い関心を持つ生徒が確実に存在しており、彼らはそのための思索と表現の場を持たずに過ごしていることを改めて知った。上記の取り組みは、生徒の声に押されて実現したものである。NIEを通して、問題意識を共有する先生方と協力しつつ、生徒の可能性を引き出す空間を広げていきたい。

おられたが昨年度より復帰され、中高生の指導に当たっておられる。今回の実践は、「NIE教養ゼミ」の再生に主眼を置かれたものである。(大阪NIE推進協議会事務局長・安田陽子)



新聞の出前教室で今年2月に盛岡市内のある小学校を訪れた。授業でスクラップ新聞作りに取り組んでいる子供たち。目を輝かせて見出し付けなどに取り組みむ姿が印象的で、授業終了後も「プロ」からコツを学ぼうとする子供たちに囲まれた◆子供たちが引いた後、一人だけになってもなお、質問を浴びせてきた少女がいた。熱意に感心し、帰り際に先生に尋ねてみた。すると、東日本大震災で被災し転校してきた子だと知った◆つらい体験をした彼女。慣れない土地での暮らしに戸惑ったに違いないが、スクラップ新聞作りを通して元気を取り戻し、NIEが心身を成長させた。熊本地震では募金活動を積極的に呼びかけ、今は個人新聞作りに意欲を燃やしているという。NIEの力を実感した。無垢な瞳が見つめる未来が素晴らしいものであったほしい。

(岩手日報社・鈴木弘樹)